

聖書日課 『からし種』 2024.3.31-4.7

<p>3月31日 (日)</p> <p>詩編 133編</p>	<p>「見よ、兄弟が共に座っている／なんという恵み、なんという喜び」(1節)。主の復活の朝、弟子たちは失望と恐れにさいなまれながらも、ひとつの部屋に集まっていた。「互いに愛し合いなさい」という主の教えを忘れなかったからだろうか。早朝、主の墓に出かけた仲間の女性たちが、驚くべき喜びの知らせをもって飛んで帰って来る時も近い。</p>
<p>4月1日 (月)</p> <p>詩編 134編</p>	<p>「夜ごと、主の家にとどまる人々よ／聖所に向かって手を上げ、主をたたえよ」(1-2節)。「夜ごと、主の家にとどまる人々」とは、夜通し神殿を守る門衛か、聖所の灯火を守る祭司か。見えないところで主のためにつとめている人々も、ともに主をたたえる仲間。「都に上る歌」も今朝で最後だが、キリストによる平和が満ち溢れる「都」に上る旅を今日も続けよう。</p>
<p>2日 (火)</p> <p>詩編 135編</p>	<p>「天において、地において／海とすべての深淵において／主は何事をも御旨のままに行われる」(6節)。「御旨が行われるように」と私たちは祈るが、その「御旨」を知るのはなんと難しいことか。詩編119編の詩人たちは主の御言葉と律法の中にひたすら御旨を求めた。イエスは血の汗が滴るゲッセマネの祈りの中で、十字架を御旨と悟り立ち上がられた。</p>
<p>3日 (水)</p> <p>詩編 136編</p>	<p>「恵み深い主に感謝せよ。慈しみはとこしえに」(1節)。攻めてくる大軍にヨシャファト王が向かわせたのは、こう歌って主をたたえる者たちであったと記されている(歴代下20:21)。真偽はともかく、絶体絶命の窮地にも、絶叫にも似た賛美で神にすがりつく旧約の人々の思いが伺える。私たちの唇からも、救い主イエス・キリストをたたえる歌が消えないように。</p>

聖書日課 『からし種』 2024.3.31-4.7

<p>4日 (木)</p> <p>詩編 137編</p>	<p>「バビロンの流れのほとりに座り／シオンを思って、わたしは泣いた」(1節)。旧約には常に「バビロン捕囚」の影がさす。「おまえの神はどこにいる」と笑われた心の痛みが、時として「異邦人」を排斥する言葉にもなるようだ。キリストはそんな人々の間に来られ、命をささげて「敵意」という心の傷を癒そうとされた。その癒しを私たちの心にもいただきたい。</p>
<p>5日 (金)</p> <p>詩編 138編</p>	<p>「わたしが苦難の中を歩いているときにも／敵の怒りに遭っているときにも／わたしに命を得させてください」(7節)。心身の苦しみに次々と襲われ、「自分は生きていることを喜ばれていないのではないか？」とってしまう...と語った友がいる。どうか、あなたが生きるためにキリストが死なれ、復活されたことを知るように。その時、あなたは命を得るだろう。</p>
<p>6日 (土)</p> <p>詩編 139編</p>	<p>「御業がどんなに驚くべきものか／わたしの魂はよく知っている」(14節)。神の御業をどうやって知るのか。目に映る大自然の美しさなどに感動することも確かにある。しかし、この詩人は「魂で知る」と言っている。魂で触れる神の臨在は、その偉大さが恐ろしくもあり、こんな小さな私たちに独り子をくださるほどの神の愛に触れて、魂から感謝が溢れ出すのだろう。</p>
<p>7日 (日)</p> <p>詩編 140編</p>	<p>「主よ、さいなむ者からわたしを助け出し／不法の者から救い出してください」(2節)。「蛇のように鋭い舌」や「蝮の毒を含んだ唇」による不当な痛みを受ける時、私たちは「神の正義」を願い叫ぶ。同じような不当な痛みを十字架の上で受け尽くされた主は、今日も私たちの「間」で執り成し祈り、私たちを神礼拝に招かれる。今週もこの方に従っていこう。</p>